

栄光と誘惑のあいだ

マタイ4:1~11 / 李正雨師

四旬節とイエス様の誘惑。個人的には、たいへんふさわしいことだと思います。私たちにイエス様の苦難と四旬節の意味を示す言葉だからです。一般的に、私たちは、イエス様の苦しみについて考えるとき、十字架の出来事を思い出します。イエス様がローマの兵士によってなぐられ、十字架につけられたことを思い出します。しかしイエス様の苦難は、肉体的なものだけにあったわけではありませんでした。イエス様は、靈的にも絶え間ない誘惑を受けました。私たちがよく知っているゲツセマネの祈りは、イエス様がどれほど激しく靈的な戦いをしておられたかを示しています。父の御心が行われますようにという祈りを三度もなさるほど、イエス様の靈的な苦しみは計り知れなかったと思います。今日の福音書は、この靈的な戦いの始まりがどうだったかを教えています。そしてこの言葉は、イエス様に従う私たちにも必要な言葉、適用される言葉だと思います。私たちの信仰の人たちも、イエス様のような誘惑を常に受けているからです。それでこの福音書の著者は、私たちが誘惑に対抗するためには何をしなければならないのか、何を捕えなければならないのかを、イエス様の誘惑のことで通して教えていると思います。

イエス様は聖霊に導かれて荒れ野に行かれます。そしてそこで、悪魔の誘惑を受けられます。これが今日の福音書の始まりです。ところが、今日の福音書の意味をさらに深く理解するためには、この誘惑のことがどんなことから続いて来たのかを調べる方がいいと思います。今日の福音書の前の箇所ではどんなことが起こったのでしょうか。イエス様の洗礼が行われました。その洗礼の場で何が起こったのでしょうか。神様の霊がイエス様の上に臨み、神様は、イエス様のことをご自分の愛する子、ご自分の心に適う者と言われました。イエス様がメシアだという神様の公式な認め、または公的な任命がイエス様の洗礼の場で起こったのです。まさに栄光なことでした。しかしこの洗礼が終わってからすぐ、神様の霊は思いもよらないことをなさいました。イエス様を荒れ野に導かれ、そこで悪魔の誘惑を受けさせられます。さらに、この誘惑はイエス様が40日間断食なさってから受けられたことです。栄光の場で荒れ野に行かれ、そこで40日間何も食べられず、悪魔の誘惑までも受けられたのです。

月にむら雲、花に風という言葉があるでしょう。良いことがあれば悪いこともあるということですよ。この世でのイエス様の栄光の瞬間も同じだったと思います。栄光の洗礼は、短く終わりましたが、その後は、荒れ野での生活と40日間の断食、悪魔の誘惑もありました。それで、ペテロの手紙一 1章24節にはこう書かれています。「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。」この世の栄光は永遠に続くようですが、そうではありません。たとえそれが神様から受けたものであっても、イエス様の洗礼に起きた栄光の出来事であっても、この世では永遠ではありません。これがイエス様の洗礼の栄光が私たちに与えてくれるもう一つの教訓だと思います。

このようにイエス様は栄光の場から離れて悪魔に誘惑されます。この悪魔の誘惑は、全部3つです。今日の福音書3節と6節と9節に書かれている言葉です。まず3節の言葉を見てみましょう。「誘惑する者が来て、イエスに言った。『神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。』」私はこの言葉が「あなたのニーズを満たさない」という言葉だと思います。自分のニーズを満たすこと。これほど私たちの人生にとって重要なことはありません。私たちは皆、自分の必要に従って生きていきます。私たちの学校、職場、趣味、友達、結婚など、重要だと思われるものは、みんな私たちのニーズと関係があります。そして私たちは、このニーズを満たすために人生の大部分を割り当てます。悪魔の最初の誘惑はこのニーズを満たすことでした。「石がパンになるように」と言うのは、当時空腹を覚えられたイエス様に最も適切な誘惑でした。しかし、イエス様はニーズを満たすことよりも重要なことがあると言われます。それは、神様の言葉に従って生きることです。

自分の必要によって生きるのはいやとは思いません。ほとんどの人がそのように生きていて、私たちの人類もそのように発展してきました。おそらく、自分のすべてのニーズを満たすことがこの世では最も栄光なものになるかもしれません。多くの人々は、必要なものがないほど自分のニーズを満たした人々をうらやましく、尊敬しているからです。しかし、イエス様はクリスチャンにとっては、これらのこと、ニーズを満た

すことがすべてになっはならないと言われます。私たちの人生の目的が必要や不足なことを満たすことだけにあるわけではないからです。これは、私たちにパンは要らないということではありません。私たちにしてもパンは必要です。しかし、パンに私たちに導かせてはいけません。パンよりも重要なこと、この世の栄光よりも重要なことが私たちに与えられているからです。私たちに向けた神様の言葉、変わらぬ約束の言葉が私たちに導かせるようにしなければなりません。私たちは、私たちの必要によって信仰を選んだのではありません。お店でパンを買うように神様の言葉を選んだのではないということです。それでイエス様は「人はパンだけで生きるのではありません」とおっしゃったのです。

悪魔の第二の誘惑は、証明についてのものだと思います。6節で悪魔はこう誘惑します。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」悪魔はエルサレム神殿の屋根の端にイエス様を立たせてこう言います。すべての状況は整えられ、イエス様は証明だけすればよい状況です。しかし、イエス様はこう言われます。「あなたの神である主を試してはならない。」イエス様のこの答えは、悪魔の誘惑の中には、神様を試そうとした意図があったことを示しています。

悪魔は証明というものを利用して、神様の民に神様に対する疑いを呼び起こしました。アダムとエバに善悪の知識の実を食べさせ、出エジプトのイスラエルの民に神様の守りに疑いを持たせました。「必ず死んでしまう」という神様の言葉より「決して死ぬことはない」という蛇の言葉を信じたアダムとエバは、死を迎えるようになりました。そしてエジプトを出たイスラエルの民は、40年間荒れ野に暮らすようになりました。証明は、人々に神様を疑わせて試させ、神様と人の間を分けさせました。ですから、蛇、悪魔は、イエス様にも証明することを要求します。神様を疑って試すことを勧めるのです。イエス様の洗礼に臨んだ神様の言葉、「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」というその言葉が真実なのか、神様を試しなさいということです。神様がおっしゃった通りであれば、いくらでも救ってくださると、もっともらしく言っているのです。

私たちの信仰生活の中でも、このような誘惑はたくさんあります。証明を求める人々も多く、時には私たちも、もう少し確信ができるように証明していただければと思うこともあります。しかし、今日の福音書でイエス様は、証明のために神様を試されません。私たち人間には、特に神様から召された人には、神様を試す権利はないからです。もし私たちに権利があれば、それは、神様を信頼する権利、神様の約束を信じる権利だと思います。神様は、私たちにご自分を試してみなさいと言われませんでした。ご自分を信じなさいと言われました。それでイエス様は「あなたの神である主を試してはならない」と言われたのです。

悪魔の最後の誘惑は、この世の栄光についてのことです。悪魔はイエス様を連れて高い山に行きます。そしてそこで、この世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、自分にひれ伏して拝むなら、このすべてを与えると言います。ここにはまず悪魔の嘘が入っています。悪魔はこの世のすべての国と栄光を持っていません。自分が持っているように言いますが、この世のすべては神のものです。悪魔の目的はただ一つ、メシアが自分の前にひれ伏すことでした。しかしイエス様は、このすべてのことをご存知でした。それでこのように言われます。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ。」何よりも神様を拝み、仕えること。これがイエス様が私たちに教えてくださった信仰であり、クリスチャンの姿なのです。

そして面白いのは、悪魔が最後に誘惑した場所である高い山は、マタイによる福音書にもう一度出てくるということです。もちろん同じ山かどうかは書かれていません。ただ高い山だと書かれているだけです。先週、福音書であるマタイによる福音書17:1を見ると、イエス様は弟子3人を連れて高い山に行かれたと書かれています。そしてそこで変容して、モーセとエリヤと共に話し合われます。これは、悪魔の誘惑がイエス様に何の影響も与えなかったことを教えてくれるものだと思います。むしろ悪魔の誘惑の場は、イエス様の栄光の姿が現れた場として再生されます。マタイによる福音書の著者は、このナラティブを通して、栄光と誘惑の場は、区別されたり離れたりしていないことを語っています。栄光があれば誘惑もあります。私たちが呼んでくださる神様の声があれば、私たちに誘惑する敵の企みもあるのです。ですから、私たちは栄光の姿をした誘惑から、私たちの信仰を守らなければなりません。いつも御言葉の中で目を覚ましてください。誘惑に勝ち、主の栄光に従ってください。神様が栄光と誘惑のあいだで悩んでいる私たちに導いてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン